

## 週刊現代を読んで医者が「やめた薬」「やらなくなった手術」

### 時代が変わり始めた！

たとえ時の権威が認めずとも、後世の人々は本誌の価値を認めてくれるはずだ。内心「薬漬け」「手術三昧」に疑念を抱いていた医者たちが、患者の熱い訴えに応え始めた。

### ■週刊現代を医者に見せる患者が急増中

関西に住む70代の男性から、本誌にこんな手紙が届いた。

「私は6年前に脳梗塞を発症し、それ以来、高脂血症薬の Crestol を飲み続けていました。しかし、飲み始めて1年くらいすると、舌や口の中が痛むようになった。食欲も落ち、口腔外科や耳鼻咽喉科に行っただのですが、『どこにも異常はない』と言われるばかりでした。

そんな中、7月に週刊現代の記事で Crestol のことを読みました。『唇や口の粘膜に障害が出る人もいる』ということだったので、私は雑誌を持って、かかりつけ医に相談してみました。

幸い、かかりつけ医は『じゃあ、いったん止めてみよう』と言ってくれた。すると、飲むのを止めてまもなく1ヵ月になりますが、ウソのように痛みが消えたんです」

男性は5年にわたり、他の医者にも口の痛みを訴え続けたが、取り合ってくれなかった。『薬の影響かもしれない』と指摘してくれる医者は一人もいませんでした。あげくの果てに、ワイパックスという精神安定剤を処方されたこともあります」というから、ひどい話だ。

これまで9週にわたって、本誌は薬と手術にひそむ知られざるリスクを詳報してきた。どのマスコミも報じなかった、医療の「タブー」を知った患者が病院に殺到し、医療現場が着実に変わりつつある。患者の要望に応じて不要な薬を減らしたり、デメリットの大きな手術を取り止める医者が出始めたのだ。

千葉県に住む70代の男性も、こう語った。

「私は今年に入って、高脂血症薬のリバロを飲んでいたのですが、4月ごろから両足のふくらはぎが痛くなり、歩くのもままならない日があって、整形外科とマッサージに通うようになりました。それがこの前、週刊現代の記事で『リバロを飲んでから突然太ももや首などが痛み出した。横紋筋融解症と判明』というのを見つけ、怖くなって服用の中止をかかりつけ医に訴えたんです。飲むのを止めてしばらくすると、痛みは消えました」

福岡県の70代男性は、前立腺がんの治療のために受ける予定だった、腹腔鏡での全摘出手術を受けるのを止めたという。

「外科医からは手術を勧められたのですが、かかりつけのクリニックの医者は『70代なら、もうそれほど大きくなるから、切らずに薬で様子を見るという選択肢もある』と言っていたんです。ちょうどその時、週刊現代を見ると『出血しやすく、腎不全のリスクがある』『尿漏れや勃起不全になるおそれもある』と書かれていて、やはり投薬治療を勧めていた。それで決心がつき、『手術は受けません』ときっぱり言いに行きました」

かねて、医者に言われるがまま手術を受けることに疑問を抱いていた患者からも、「週刊現代を読んで、やはり自分は正しかったのだと思った」と安堵する声が届いている。北海道に住む60代女性が、本誌にこのようなメールを送ってくれた。

「昨年、子宮からの不正出血で産婦人科にかかったところ『原因が分からない。がんかもしれないから、札幌のがんセンターに行きなさい』と言われたので、紹介状を書いてもらいました。

それが、がんセンターの医者は、検査を終えるやいなや『出血の原因はやっぱり分からないが、がんである確率も低くはない。念のため、子宮と卵管、卵巣を全摘出したほうがいい』と言い出したのです。私は納得がいかず、答えを保留しました」

女性はその後、手術を断り、お腹を冷やさないようにするなどの治療法を自分で試してみたという。

すると、

「2週間くらい経ったところから徐々に出血が減り始め、1ヵ月後、完全に止まったのです。私が受診したがんセンターの医者は、笑みを浮かべながら『全摘出しましょう』と言っていました。が、心底腹が立ちました。週刊現代にも私と同じような方の体験が紹介されていて、『医者と言いつつ何でも鵜呑みにしていたら、とんでもないことになるんだな』と実感しました」

## ■人工関節はもうやめた

さらに、福岡県に住む60代の男性も、本誌にこんな体験を寄せた。

「50代半ばの頃、突然足がしびれて、左の股関節が痛むようになったんです。整形外科を受診したら、変形性股関節症と診断された。しばらくの間は痛み止めの薬などで我慢していたのですが、とうとう耐え切れなくなり、人工股関節に置きかえる手術を受けました。

しかし、その後も痛みはなくなり、しかも筋肉をかなり取り切ったせいか、長い距離を歩くのがつらくなってしまったのです。実は現在、右の股関節も同じ病気になっているのですが、週刊現代を読んで、初めて人工関節手術のリスクをちゃんと知ることができました。一時は右脚も人工股関節にすることを覚悟していたけれど、今となっては、もう手術を受けようとは思いません。医者にもそう伝えました」

世の中のすべての医師が、手術後の生活のことや、患者ひとりひとりの気持ちまで親身に考えてくれるわけではない。外科医の中には、本音では「とにかく手術をしたい」、「それが自分の実績になる」と考えている者さえいるのだ。

薬に関しても、仲のいい製薬会社の担当者から勧められ、大量の薬を処方している医者は珍しくない。だが本誌の問題提起で、「できれば減らしたほうが良い薬」や「見直したほうが良い薬」について、だんだんと認知されてきた。大学病院に勤務する内科医が言う。

「降圧剤については、週刊現代を持ちこんで『飲みすぎはよくないと書いてあるのですが、減らせますか』と聞く患者さんが増えました。いいことです。患者さんは皆、『降圧剤は一度飲み始めたら一生飲み続けなければならない』と思っ込んでいますが、血圧が安定していれば、様子を見ながら減らすべきなのです。

特に夏場に注意しなければいけないのが、利尿剤とよばれる種類の降圧剤です。体の水分を尿として外に出すため、脱水症状を起こすおそれがある。同じく降圧剤のカルシウム拮抗薬も、目まいを起こす人がいます。こうした副作用を抑えるための薬が増え、すると胃が痛くなって胃薬をもらう……と、どんどん薬が増えていってしまう」

他にも、本誌を読んだ患者の訴えで、医者が「出すのをやめた薬」は枚挙に暇がない。詳しくは、下の一覧表を参照してほしい。

認知症でも、代表的な薬アリセプトには「徐々に服用する量を増やしていく」という理不尽な規定がついこの前まで存在したが、折しもこの6月に撤廃された。規定撤廃のはたらきかけを行ってきた、長尾クリニック院長の長尾和宏氏が言う。

「アリセプトなどの抗認知症薬には、吐き気や食欲不振、服用者が興奮して暴れるなどの副作用がありますが、多くの医師は『怖い薬ではない』という認識。なかには『きわめて安全な薬』『暴れるのは元気が出ていいこと』と言う専門家もいる。これで本当に患者さんのための認知症医療と言えるのでしょうか」

タブーに斬り込むことには反発が伴う。しかし確実に、時代は変わり始めた。ときには患者の側から、「本当にこの薬を飲み続けるべきか」、「本当に手術を受けなければ治らないのか」を医師に問いかけてみるべきだ。心ある医師なら、必ずや耳を傾けるはずである。

## 週刊現代を読んで医者がやめた薬・やらなくなった手術

病名	薬・手術の種類	解説
高脂血症	クレストール、 リバロ (スタチン系薬)	口内炎や胃炎などのほか、稀ではあるが、横紋筋融解症という筋肉が溶け出す副作用が出る場合がある。「リバロを飲んでいてふくらはぎが痛くなり、マッサージに行っても治らない。主治医に薬を止めてもらったなら治った」(70代男性)。筋肉痛がサイン
高血圧	ラシックス (利尿剤)	血圧を下げるため使われる利尿薬にはサイアザイド系、ループ利尿薬などがある。ループ利尿薬のラシックスは飲んでいる人が多く、医師への相談も多い。「尿で体外に水分を排出するので、汗をかく夏場は脱水症状に注意が必要」(大学病院勤務の内科医)
	ノルバスク、 アダラート (カルシウム拮抗薬)	血管壁の細胞に作用し、血管そのものを押し拡げることで血圧を下げる薬。目まいなどの副作用を起こし、医師に減薬を訴える人が少なくない。「効果が確実で当初は画期的な薬だったが、効き目が長時間続くので血圧が下がりすぎることも」(内科開業医)
	プロプラノロール (βブロッカー)	降圧のほか狭心症や不整脈の治療にも使われる。交感神経に作用し、心臓自体のはたらきを抑え血圧を下げる。糖尿病患者や高齢者には使うべきでないといわれる薬だが、実際には処方されて飲んでしまい、動悸や息苦しさ、低血糖などの副作用が出る人もいる
糖尿病	インスリン	高齢者が血糖値を薬で無理に下げた必要はないが、医師・患者ともに「死ぬまでインスリン注射を打つのが当然」と思い込んでいる人がほとんど。「活動量も食事量も減ってくれば、むしろ低血糖などのリスクを考慮すべき」(前出・大学病院勤務の内科医)
認知症	アリセプト	下痢や怒りっぽくなるなどの副作用が多数報告されており、「困っている」「実は、副作用が怖くてちゃんと飲ませていない」という家族も数多い。学会はこれまで「徐々に服用量を増やさない」というガイドラインを設けていたが、6月に撤廃された
風邪などの感染症	クラリス、 オラセフなど (抗生物質)	風邪などで医者にかかったとき、「とりあえず」の薬として処方されることが多いが、「実は風邪などのウイルスには何の効果もなく、ただの気休め。飲む必要はない」(前出・内科開業医)。体内で、薬に強い「耐性菌」が作られてしまうというデメリットもある
リウマチなど	人工関節 置換術	読者から「手術を受けて後悔している」、また「週刊現代を読んで手術を受けるのを取り止めた」という声が多く寄せられているのが人工関節。実は耐用年数が20年前後と言われており、緩みやズレなどの不具合が出たら再手術をして取り換えるしかない
前立腺がん	腹腔鏡による 全摘術	腹腔鏡による全摘出を勧める医師が多いが、海外では、がんの成長がなければ切らずに様子を見るのが常識。「週刊現代で『10年生存率が90%以上』と読んだことも手術を止めた理由の一つ」(70代男性)。針を使った事前の生体検査で大出血するケースもある
女性特有の病気	子宮全摘術	子宮や卵巣などの病気では、医師は何かと全摘出をすすめがちだが、これらを失うことは女性としての尊厳にもかかわるので迷う人が多い。「『全摘出しましょう』と言われて納得がいかなかった」(60代女性)。手術後、ホルモンバランスが崩れるケースも少なくない

「週刊現代」2016年8月20日・27日合併号より